

七転八倒の人生

いまから五十余年前、山梨県の実家で、「棟上げ式」(家を建てる前の儀式)を行なった際に、百人もの職人が集まって盛大な宴会が催されました。そして、腕のいい大工だった祖父と父が、「棟梁」棟梁」と皆から慕われている光景は、いまでも私の脳裏に鮮明に焼き付いています。祖父、父と続く大工の家系に生まれた私が、同じ道を歩もうと決意するのにそれほど時間は掛かりませんでした。十五歳で埼玉県の工務店に年季奉公を志願した私は、「祖父や父のような立派な棟梁になりたい」との志を胸に、誰よりも早く現場に赴き、仕事が終わった後も、夜遅くまで技術の習得に努めました。そうして、のこぎりやカンナの使い方を一つひとつ学んでいった私は、三年目で簡単な建売住宅を任せられるまでになったのです。

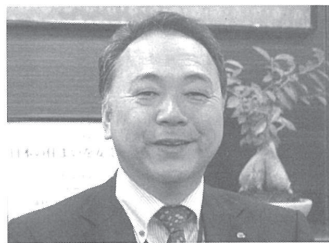
ところが、喜びも束の間、休業していた工務店が突然倒産し、親方も失踪。請け負っていた現場作業も中断され、私はどうすればいいのか途方に暮れました。しかし、元請けの方に、「何とか続けてほしい」と懇願された私は、知人の業者や職人を手配して仕事を完成。この仕事を評価されたことが、私に独立を決意させるきっかけとなったのだった。

昭和五十三年、埼玉県内のアパートの一室で、「都興建設」を創業。若い私はどんな仕事も二つ返事で引き受けたため、重宝がられ、一年目の仕事は順調でした。しかし、だんだんと元請けから平然と手抜き工事を指示されるなど、無理難題を押しつけられるようになったのです。それでも私は職人としての矜持から、あくまで自分が求める水準の仕事をし続けました。そのため、働けば働くほど赤字が累積、パンの耳で食い繋ぎながら、三百六十五日働いてやっと倒産を免れるという窮状に陥ったのです。

アキュラホーム社長

宮沢俊哉

人生は独楽である



みやざわ 俊哉——昭和34年東京都生まれ。中学卒業と同時に埼玉県の工務店で大工修業を始め、19歳で独立し、「都興建設」を創業。56年リフォーム業を専門とする「都興繕繕」を設立し、61年注文住宅の「すまいの都」(現・アキュラホーム)を設立、現在に至る。

をお客様に押し付けていたにすぎなかったのです。たちまち赤字は膨らみ、再び倒産の危機に立たされたのです。

その後も、差別化すれば売れるだろうと、平成元年に輸入住宅専門会社を設立。カナダの輸入住宅を始め、話題を呼んだものの、「珍しい」と「住みたい」がイコールになることはなく、またもや赤字を計上。これまで苦業をともにしてきた多くの社員も当社を去っていき、まさにこの時期の私は進むべき道を見失っている状態でした。

そこで私はハタとこう思い至ったのです。もう一度、大工としての原点、お客様が望む住宅とは何なのかという原点に立ち返ろうと。

そうして行き着いたのが、普通のサラリーマンでもローン返済に苦しめられることなく、家族と長く快適・安全・幸福に暮らしている住宅。つまり、「高品質・低価格」の住宅を徹底して追求しようという結論でした。

幸い様々なことに挑戦してきた当社には鉄骨高級住宅、輸入住宅など、あらゆるノウハウが蓄積されていました。私は性能や品質の共通点、工法や構造の基本要素を地道に分析した結果、どの工法よりも資材に汎用性があり、合理化の余地を残しているのは日本の新築の七割を占める大造軸組工法だと確信。そこで、部分的に行っている価格体系やコスト計算を、釘一本に至るまで徹底して洗い出す作業を開始しました。そして、材料単価、工事単価、見積もりなどのすべてをデータベース化し、品質を落とさず無駄を省いて、従来の二、三割のコストダウンを可能にしたのが、現在の

の「アキュラシステム」に他なりません。

このシステムの導入によって当社への注文は飛躍的に伸び、この十年で営業利益はほぼ五倍、平成二十六年二月決算で売り上げは三百九十六億円を達成。また、地方の工務店が活力を取り戻す契機になればと、平成七年にシステムをパッケージ化して市販。その四年後には、システムを導入してくださった工務店やビルダーを「アキュラネット」(現「JAHB.net」というネットワークで結び、現在二千六百社の会員企業様がお互いにノウハウの提供や情報交換などを行う場に成長しています。

そのような七転八倒の人生の中で、いつしか私の座右銘になっていった言葉があります。それは「人生は独楽である」という言葉です。

独楽は、しっかりとした基軸がないと、うまく回ることができません。また、早く回しすぎても場外へ飛び出てしまい、かといって、遅く回しすぎてもバランスを崩して倒れてしまう。その独楽と同様に、人生も経営もまずしっかりとした軸つまり、その状況で果たすべき目標、夢、志があれば、安定した正しい舵取りはできないのです。そして、焦って時代の先端を追いすぎてもいけないし、いつまでも古い考えに固執しすぎても世間から忘れられてしまいます。まさに、私の紆余曲折を経た人生は、この言葉の意味するところを体現してきたといつてよいでしょう。

やる気こそ、人生を切り拓く

世間でもよく言われることですが、私は自らの

経験から、人生でも仕事でも、成功を掴むには能力や知識だけでなく「やる気(熱意)」や「考え方が非常に大事なのだ」と方々でお話ししてきました。例えば、知識も経験もない新人が社歴の長いベテランに営業成績で勝ってしまうことがあります。それはただ一点、「やる気」の差があるからに他なりません。

それでは、「やる気」を引き出すために何が必要かといえば、それは、将来自分はこういう人間になりたいのだという目標、志を持つことです。自身、右往左往したものの、創業時から、「祖父や父のような立派な棟梁になりたい」「皆が喜んでくれる住宅をつくりたい」との志を胸に、お客様のものに足繁く通い、断られても、断られても、必死に見積もりを取り直し、提案し続けてきたことで、いまがあるのだと実感しています。そして、目標さえあれば、どんなに辛いことがあったとしても、「目標実現への修業なのだ」と考え方を転換することができ、目の前の困難を「成長するための辛抱なのだ」と捉えることができるようになるのです。

最初の目標は、おいしい料理が食べたい、旅行がしたいといった些細なことでもよいのです。大切なのは、それらすべてをやる気、考え方の転換に結びつけていくことです。そうして日々の課題に一所懸命取り組んでいけば、自らの経験とスキルの上上とともに、少しずつ高い目標へと変化していき、いつしかやる気が熱意に、そして、熱意が高尚な「大志」といった不動の基軸となって、人生や仕事を善き方向に導いていくことができるでしょう。